

印旛郡市理科作品展一般公開が無事終了しました



印旛郡市理科作品展の一般公開が9月25日(土)に行われました。およそ400名の方が来場され、とても賑わいを見せた作品展となりました。標本、論文、工夫作品のそれぞれの部門において、子ども達のすばらしい作品が並びました。また、教職員自作教具の部でも2名の先生が出品されました。

各部門審査責任者の先生方からの講評

<小学校標本の部> 渡貫 健 先生(白井市立清水口小学校)

今年の小学校標本部門への出品数は、1部会~5部会合わせて142点にのぼりました。その中から各部会での審査を経た44の力作を審査させていただきました。

作品を見せていただくと、昆虫や植物、石や砂、貝殻といったオーソドックスな題材が多い中、「魚のうろこ」や「寄生虫」が新鮮でした。何らかのきっかけで興味を持って取り組んだものと思えました。

一方で、「定番もの」であっても「かなりの時間をかけているな」「親子で楽しみながらやったんだな」と想像されるものも多く、ほほえましく感じました。作品处理的には正直なところ今ひとつであってもよい思い出・よい経験になったことと思います。

そんな中から、6点の金賞作品を選ばせていただきました。選考の際の基準としては「標本作品の基本的な事柄がしっかりしているもの」を第一としました。やはり金賞作品は他の模範として見られることになるからです。堅苦しい考え方もかもしれませんが、標本来の目的からすると、やはり製作や作品処理における基本的な事柄をしっかりすることは大切です。「自由研究指導法研修会」のような機会を通じて今後も繰り返し示していきたいと思えます。

<小学校科学工夫作品の部> 有田 善治 先生(印西市立永治小学校)

毎年どんな作品が出てくるのか楽しみな工夫作品。審査委員一同、童心に返って楽しく審査させていただきました。

低学年では、ゴムや磁石、モーターの振動を利用した物が多く出品されていました。遊ぶ人が自ら遊び方を工夫して楽しむことができる、低学年らしい発想の作品が多くありました。

中・高学年では、指導の行き届いた完成度の高い作品が多く出品されていました。蓄電や発電を利用した工夫あふれる大作がありました。また、細部に「こだわりや丁寧さ」が見られ感心させられました。

全体を通して感じたことは、子どもたちのアイデアの豊かさです。家族で行った遊園地や水族館、動物園、博物館、科学館などで発見したことをもとに「作ってみる」。そして、試してみても、遊んでみて、工夫して楽しみ、完成された作品となっていることを感じました。来年もまた、アイデアのたくさんつまった科学工夫作品が、数多く出品されることを期待しています。

<小学校科学論文の部> 貝塚 健太郎 先生(四街道市立大日小学校)

今年度も、日常生活の中で感じた疑問に対して、根気強く実験や観察に取り組んだ論文が多く見られました。

審査の結果、金賞に選ばれた論文は、感じた疑問に対して、予想をしっかりと立て、解決の見通しを持って取り組んでいました。結果が予想通りにならなくとも、そこから改めて疑問を持ち、もう一度やり直すことなどを行っており、論文作成の手本になっています。

また、今年度は、環境問題に目を向けてテーマにしている論文が中・高学年に多く見られました。

自分の研究テーマをはっきりさせ、疑問に思ったことを最後まであきらめずに追究していくことがよい科学論文作成のポイントです。今後も、自然や科学が大好きな児童、生徒が増えていくことを心から願っております。



<中学校標本の部> 小野 哲 先生(四街道市立四街道北中学校)

中学校の標本部門は、出品数が16点と昨年度並でここ数年の傾向にあるように少なめでした。内訳は植物標本・昆虫・貝・骨格など多岐にわたり、審査するにあたって専門的な知識がないと判断しがたいものもありました。金賞には4点を選出しました。中でも「自宅周辺里山のチョウ類」は標本の数・処理の仕方ともに申し分ない上、標本箱も自作で裏側からも見ることができると素晴らしいものでした。「人間と動物の骨のつくりはちがうのか? - 骨の研究 - 」については、標本ではなく作品ではないかという声もありましたが、努力と完成度の高さを評価しての受賞としました。また、基本的な処理がしっかりされており、数も揃っているなど金賞に値する作品ではあるものの、種の同定が間違っているために受賞を逃すものもありました。

標本を作成するには採集から標本への処理、種の同定など多くの手間がかかるので、取り組んだというだけでその意欲を評価できると思います。標本づくりに取り組むことで、身近な自然に目を向ける理科好きの生徒が多く育っていくことを願っています。

<中学校科学工夫作品の部> 武藤 吉実 先生(印西市立西の原中学校)

小学生は低学年から高学年まで楽しい「動くおもちゃが」並んでいます。中学生になると、おもちゃではなく、普段の生活の中から何か役に立つことはないかと考えて、作品を作っています。特に目の不自由な方用に、下の案内ブロックに磁石を埋め込んでおくところに触れると振動する杖「ふるえる杖」やおばあちゃんが寝転ぶだけで湿布が貼れる「貼れないところも1人ではれーる」などお年寄りやハンディキャップを持った人用の工夫工作がすばらしいです。また、「ソーラーの電源」等災害に使える作品もありました。とても楽しい審査でした。

<中学校科学論文の部> 大三川 弘 先生(佐倉市立白井西中学校)

各部会から選ばれた43作品を慎重に審査しました。生物分野が22作品と全体の半数を占め、物理16、化学3、地学2作品という内訳でした。今年度も身近な自然や現象をテーマにユニークな視点でとらえているものや根気強く、継続的に取り組んだ論文が多くありました。

金賞を受賞している論文は、テーマの独自性と科学論文にふさわしい質と量が備わっており、考察がしっかり書けていました。特に観察や実験を多く重ねることによりデータの裏付けがあるものや自然の豊かさを数値化したもの、地道な継続研究でライフワークとして今後も続けることを期待したい論文が高い評価を受けていました。

どの論文からも粘り強さと意欲が伝わってきましたが、苦労して得たデータを十分に考察に生かされないものがありました。条件制御やデータの処理、生物領域や物理領域などの各領域にふさわしいまとめ方を工夫し、考察に生かせると更に良いと感じました。

24日の審査会後は、大変お忙しい中、北総教育事務所所長 見田豊茂先生にもお越しいただきました。一つ一つの理科作品をじっくりとご覧になりました。

